

### 百見は一触にしかず

笹川 英夫<sup>1</sup>

言葉遊びのような表題で恐縮である。なぜ、このような表題になったか、経緯を簡単に述べよう。昨秋日本土壤肥料学会の2010年度大会が北海道大学で開かれた。学会発表の合間を利用して、前々から行ってみたいと思っていた近傍施設を見学を訪れるのが学会参加の1つの楽しみである。今回訪れたのは、ニッカウキスキー 余市蒸溜所であった。創建当時の建物が広大な敷地の中に点在する美しさと、創業者竹鶴政孝のウイスキーにかける思いについて話すガイド嬢の素晴らしい説明に感動して帰ってきた。その夜に、旧友と一献傾ける機会があり、ニッカの蒸溜所はまさに「百聞は一見にしかず」だったと話をしたら、すかさず彼から「一見」よりももっとパワフルなのは、「一触」だと教えられた。なるほど、土などはまさに百回見るよりも一度触って、その感触を肌で感じた方がうんと効果的ということである。確かに、幼子は土いじりや砂遊びが大好きである。彼らは無意識に土を触り、肌でそのおもしろさを感じているのであろう。甲子園球児が戦い敗れて、悔し涙を流しながら甲子園の土を集めて持ち帰る姿にわれわれは感動するが、選手にとっては、土に触れ、自らの手で土を集めた行為そのものが、来年に向けての雪辱を期す糧になっていると思われる。

私の主たる研究分野は、共生生物窒素固定である。土壤中に存在する微生物と植物とのインタラクションを研究課題にしている関係で、講義は植物栄養、植物生理・生化学、土壤学まで担当している。土壤学の講義で、三角図による土性区分を説明する時に、必ず思い出して学生に話すことがある。40年近く前のことだが、私が大学院生だった時に、静岡大学農学部に加藤芳朗先生の集中講義を聴く機会があった。講義が終わって、大学校内の土を見に行くことになったので私も参加した。晩秋の冷雨が降る中を、親指と人差し指、中指で土をちょっとつまみ、これは埴壤土で粘土は何%、砂が何%と1時間以上もかけて、“指で触れる教育”をしていただいた。先生には申し訳ないが、教室での講義の中味はほとんど記憶にない。しかし、“指で触れる教育”で体験させていただいた土の感触は今でも忘れないでいる。

触って覚えるという行為は何も土に限ったことではない。昨年末、秋田県田沢湖だけに生息し、約70年前に絶滅したとされる淡水魚クニマスが富士五湖の西湖で見つかった。本物であることを確認した京都大学総合博物館の中坊徹次先生は、「魚の見分け方は、本で勉強するより実物の魚を“触って”覚えました」とおっしゃっている。車のボディーのなめらかな曲線は、手で触って確認するのが最も確かという話しも聞いたことがある。職人肌の物作りの名人になればなるほど、指先の感覚（触覚）は視覚の何倍も何十倍も確かな感覚となるのだろう。学生実験や実習の指導にも似たようなことが言える。グループで実験・実習をさせると、手を下してやる学生とそうでない学生が必ずできる。学生実験や実習では、個人が実験器具や装置に触れ、自らの感触として実験・実習の全体像を把握させるのが重要と思っている。したがって、私は、可能な限りそのよう実験・実習のプログラムを組むようにしている。

昨今、「食育」という言葉が盛んに使われているが、「食育」とは「食」に関する知識と「食」を選択する力を習得し、健全な食生活を実践することができる人間を育てることである。「土育」という言葉があるかどうかは知らない。ましてや、「触育」という言葉があるとはとても思えない。しかし、思えば6、7年前に、土（砂と粘土と言うべきか）を絞りながら丹念に球体を作り上げていくと、ついには表面のどこにも凸凹がない球体ができ、さらに「さら粉」（土に含まれる乾燥した粘土鉱物）を表面にまんべんなくすり込んでいくと、土とは思えない輝きを放つ、「光る泥だんご」ができるというのがあった。あちこちの幼稚園で実践教育として取り入れられ、園児の教育に一役買ったことを覚えておられ方も多かろう。このような教育が、まさに「土育」、「触育」と言えるのではなかろうか。

生命と環境を育む土の重要性については、土壤に関係する学会等で折に触れ啓蒙活動がなされている。また、土壤観察会が企画され、肌で土の魅力や重要性を伝える取り組みもなされている。土との関わりが希薄になる10代、20代の若者に、ぜひこのような企画に参加してくれることを願いたい。一方、土壤研究にたずさわる側には、魅力ある「土壌教育」に関する体系作りが求められよう。私はあと1年で退職するが、土に直接触れて土の魅力や重要性を伝えるような「土壌教育」に貢献できる機会があれば、可能な限り関わりたいと思っている。

<sup>1</sup> 岡山大学大学院自然科学研究科（農学系）